

高橋亨『朝鮮儒学史』第十冊（昭和三年三月三十日）

井上厚史

[解題]

本資料は、高橋亨（一八七八―一九六七）が戦前の朝鮮半島に創設された京城帝国大学に奉職していた時に書き残した膨大な講義ノートの内、『朝鮮儒学史』と題された二十余冊の中から、特に李退溪について解説した第十冊（昭和三年三月三十日の日付を持つ）を取り上げ、その「生涯」に関する部分を翻刻したものである¹。

高橋亨は、明治三五年（一九〇二）に東京帝国大学文科大学漢文科を卒業後、韓国政府の招聘を受けて官立中学校備教師として明治三七年（一九〇四）に渡韓し、大正八年（一九一九）に「朝鮮の教化と教政」によって学位を取得して、大正一五年（一九二六）京城帝国大学法文学部教授（朝鮮語学朝鮮文学第一講座担当）に就任した²。高橋の李退溪に関する関心は、生涯において三度の論文が書かれたように、常に朝鮮儒教を語る際の核心に位置づけられていた³。

李退溪に関する専門書は戦後いくつも出版されているが、その量と質において、いまだに高橋の李退溪論を超えるものはなく、屹立した研究成果であると言ってよい。しかも、発表された論文以外に、今回翻刻する講義ノートには、論文「李退溪」には収録されなかった膨大な資料調査の痕跡が記されており、高橋の朝鮮儒学研究の全貌は、今後この講義ノートの解説によって初めて明らかにされるであろう。

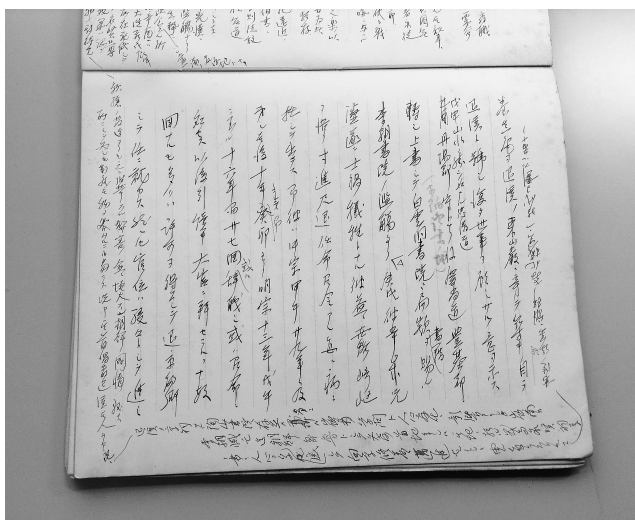
したがって、本資料翻刻は、いままで未発掘であった高橋亨講義ノートの解説文を提示することにより、今後の李退溪研究の新境地を開くきっかけになることを期するものである。

-
- 1 高橋亨の京城帝国大学における開講科目と残された講義ノート（朝鮮思想資料）の概要については、川原秀城・金光来編訳『高橋亨 朝鮮儒学論集』知泉書院、二〇一一、四二七―四二八頁、および権純哲「〔増訂〕高橋亨の朝鮮儒学研究における「異学派」：京城帝大講義ノートを読む」（『埼玉大学紀要』教養学部 50（1）、2014）を参照のこと。
 - 2 高橋亨の学問形成と時代背景については、権純哲「高橋亨の朝鮮思想史」七三―八三頁、および通堂あゆみ「高橋亨と朝鮮」（前掲『高橋亨 朝鮮儒学論集』所収）を参照のこと。
 - 3 「朝鮮儒学大観」（一九一二）、「朝鮮儒学大観」（一九二七）、「李退溪」（一九三九―四〇）。

[凡例]

資料翻刻にあたっては、以下の点に留意した。

- 1 原文は、下の写真のように高橋本人によるペン書きの草書体で書かれており、大学ノートを横向きにして、下半分に縦書で講義内容が書き込まれ、補充したい語句に○や□等の印が付けられており、上半分に多くの場合赤ペンで該当箇所に関する注記内容(多くは原典の引用文)がやはり縦書で書き込まれている。注記であるにもかかわらず、多くの場合ノート全面にわたって(時にはノートの余白部分にまで)細字でぎっしり書かれており、解読は容易ではない。本翻刻では、膨大な書き込みであるため、この赤ペンによる注記はすべて脚注に回すことにした。
- 2 原文は、カタカナ書きの歴史的仮名遣いによる文語体(古典文法)によって表記されている。原文の復刻である以上、忠実に翻刻することに努め、あえて平仮名や現代仮名遣いに直すことはしなかった。ただ、漢字については、儒者の名前は旧漢字をそのまま利用し、それ以外は常用漢字に直した。人名に使われる漢字の多くが日本の常用漢字には含まれていないためである。
- 3 翻刻するにあたっては、研究者の便に資するように、川原秀城・金光来編訳『高橋亭朝鮮儒学論集』(知泉書院、二〇一一)に収録されている論文「李退溪」と比較し、大きな異同がある場合にはその旨を注記し、文語体が口語体になっている等の単なる文体の相違については一々注記しなかった。校訂者による注記は平仮名で記し、カタカナ書きによる注記はすべて高橋自身によるものである。
- 4 通読の便を考え、難読の語には振り仮名をつけ、書名には『 』を、文書名には「 」をつけ、適宜読みやすいように改行を施した。また、文中の()は高橋自身による補足であり、[]は校訂者による誤字や脱字の修正等を意味している。



李朝儒学史第二期

上来李朝儒学ヲ歴叙シテ李退溪ノ前ニ及ベリ。今ヤ李退溪ヲ述ベントシテ、李朝儒学・其第二期、即其發達ノ絶頂ニ達ス⁴。

蓋シ国初ヨリ金佔僊齋迄ハ姑ク之ヲ賞キ、金寒暄・鄭一薨二氏ハ踐履ヲ重ジテ『小学』一書ニ法門ヲ開キ、其学趙靜庵ニ伝ハリテ『小学』ノ他『近思録』ヲ奉持シテ少シク所謂性理道学ノ門徑ヲ拓キシガ、惜矣哉、其学問大成スルニ至ラズシテ、綾城ニ冤死シ、彼ト共ニ同進ノ名士皆禍ニ罹リ、共ニ深く懲戒セル士流ハ、一時口ヲ緘ジテ道学ヲ言フヲ輟メ、檢束ヲ脱シ、放縱ニ趨ルヲ以テ士習ノ常トナシテ、以テ時ノ權奸ニ悦ヲ取り、僅ニ金慕齋兄弟、李履素齋等ノ篤学者、京郷一隅ニ道学ノ線脈ヲ伝へ、其門徒亦少カラズ。

既ニシテ中宗晩年悔悟シテ、權奸等亦相率テ失脚シ、道学復タ漸ク其墜緒ヲ序ツ。

李晦齋ハ、官場ニ在リテ志攻学ヲ忘レズ。洛閩諸子ノ書ニ付テ造詣超妙、夙ニ其宇宙觀及人生觀ニ於テ思索窮理ヲ極メ、縦令生時未ダ顕レザリシト雖、遺什ニ由リテ優ニ朝鮮古來第一流ノ道学者ノ位置ヲ与ヘラレ、以テ李朝儒学ノ到達点ヲシテ俄然トシテ高遠深慮ナラシメ、『小学』以前並ニ周程朱四子ノ著ニ依リテ宋学ノ心髓ヲ檢覈スルノ先驅ヲナス。

4 一九三九（昭和一二）—四〇年にかけて『斯文』に連載された「李退溪」では、序言の冒頭に「朝鮮の儒学を研究して、李退溪に至るに及びて、始めて学問道德兼備の偉大なる儒学者に遭遇することが出来る。否、独り儒学といふ狭き観点よりでなく、広義の文学全般から謂つても、『退溪集』を得て、此に始めて崇拜するに足る高度の水準に達せる朝鮮の文献に接する歓喜に浸るを覚える。実に李退溪は朝鮮の雲の如く林の如き学者群に在りて、宛ら明月の群星に於ける、古柏の雑木に於ける、岱宗の衆山に於けるが如くである。むしろ其の心術に就いて觀れば、相類を殊にするが如き觀さへもある。」という一節が書き加えられ、李退溪に対する最上級の尊敬の念を表した後に、朝鮮の儒学を三期に分け（第一期として国初から李退溪以前まで、第二期として李退溪から宋尤庵以前まで、第三期として宋尤庵から国季まで）、趙靜庵、李晦齋、李退溪、李栗谷、宋尤庵等の概略を記し、末尾に「以上は李朝に於ける儒学の三期の有する意義であるが、其の中にも第二期が最重要期であつて、此期に至りて朱子学が完全に理解せられて朝鮮のものとなりて、此に朝鮮儒学發達の最高点に達し、同時に学説の分岐を孕み、以て次期の千波万波重畳を起す因となつた。而して第二期を代表する最大の学者は我が李退溪である。」と記して締めくくっている（川原秀城・金光來編訳『高橋亨朝鮮儒学論集』知泉書院、二〇一一、五一—五六頁）。ここには、一九三七（昭和一二）年七月七日に勃発した盧溝橋事件に端を発する日中戦争（支那事変）に朝鮮人を戦闘員として動員しようとした朝鮮総督府の意向に沿った、高橋亨の李退溪評価の百八十度転向の痕跡が見られる。高橋は、李退溪を最大級に顕彰することによって、朝鮮人の自尊心に訴え、戦争への賛同を得ることを目論んでいた。詳しくは、拙稿「近代日本における李退溪研究の系譜学—阿部吉雄・高橋進の学説の研討を中心に—」（鳥根県立大学総合政策学会『総合政策論叢』第18号所収）、および「高橋亨の李退溪解釈—張志淵との論争を中心に—」（2012年9月28日台湾大学人文社會高等研究院で開催された「東亞視域中的韓國儒学研究」國際學術研討會議程における発表原稿）を参照されたい。

次デ⁵、開城学派即主気派ノ学祖徐花潭ハ、朝鮮ニハ珍シキ独創的学風ヲ打建テ、師承ナク同攻ナク孤往独窮、遂ニ張横渠ノ太虚一元ノ説ニ徹見シ、次デ朱子ノ理気二元説ヲモ窮メ、結局羅整庵ノ流ヲ酌ミテ氣ヲ主トシテ、而シテ理気二元ヲ認ムル宇宙觀ヲ樹テ、更ニ邵康節ノ教学ヲ^{かくせん}嚴闡シ、修養ニ在リテハ濂溪ニ承ケテ静ヲ尚ビ、自ラ以テ千古不伝ノ道秘ヲ発セリトナシ、其門徒亦仰テ以テ泰山北斗並ニ横渠ト拮抗スルニ足ル大儒トナス。

次デ、宣祖ノ特眷ヲ受ケシ柳眉巖アリ。博覽強記、訓詁記誦ニ在リテ当代比ブ者ナク、經伝・語録ニ於テ注所ニ到リテ、即朱子学ガ完全ニ朝鮮儒学トナレルナリ。而シテ此ニ到ラシメシハ、即我ガ李退溪ノカナリ。李退溪ヲ以テ李朝儒学ガ其第二期ニ入ルトナス所以ナリ。

第一章 李退溪

第一節 彼ノ生涯

彼ハ真宝李氏。高麗末、真宝官吏ヲ以テ司馬試ニ中リ、後其子脩ノ貴キニ依リテ密直使ニ追贈セラレシ碩ヲ以テ第一世トナス。退溪ハ第七世ニ^{あた}中^た当ル。第二子脩ハ明書業ヨリ出身シテ、恭愍王朝紅賊ノ乱ニ鄭世雲ニ從テ京城ヲ回復シ、安社功臣ニ録セラレ、松安君ニ封ゼラル。第三世云侯中訓大夫軍器寺正、第四世禎中直大夫善山府使、第五世繼陽進士、第六世埴進士、即退溪ノ父ナリ。埴ノ弟埴ハ松齋ト号シ、参判ニ至ル。埴ハ四十歳ニシテ没シ、屢々科擧ニ応ジテ意ヲ得ズ、村里ノ一学究トシテ没ス。埴先妻金氏ニ二男、後妻朴氏ニ五男アリ。第三男滉ハ大司憲参判ニ止リ、第四男澄ハ顯レズ、第五男即退溪ナリ。名ハ滉、字初学ハ李浩、後景浩ト改ム。

燕山君七年弘治十四年辛酉十一月二十五日、礼安郡温溪ノ里弟ニ生レ、翌年父埴没シ、母朴氏孤養ス。六歳、隣家ノ老夫ニ就テ千字文ヲ学ブ。十二歳、叔父松齋埴ニ就テ論語ヲ学ブ⁶。稍長ジ郷校ニ上ルニ及ビテ同郷ノ先輩聾巖李賢輔ニ就テ質疑ス。彼ガ一生ヲ通シテ教ヲ受ケシ師ハ、松齋、聾巖、二人ノ外ナシ⁷。

十九歳頃既ニ道学ノ端緒ニ於テ見ル能アリ。詠懐シテ曰ク、

5 童蒙教官・朴昂山ハ、『小学』ニ捫リテ師道ヲ尊嚴シ、在京士流ノ子弟多ク聖衆的宋学ヲ教授セラル。

6 「彼、額角豊広ナリ。松齋之ヲ奇愛シ、常ニ広頰ト曰テ名ヲ呼バズ。（言行録、李安道）門戸ヲ持スル者ハ是児ナリトナス。』『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、この注記は本文に書き込まれている。

7 高峯撰「退溪先生墓誌銘」。「先生生未晬而孤。少受学于叔父松齋公。既長。劬書厲志。益自刻苦」。李中麟「松齋〔続〕集跋」。「於乎。吾從先祖松齋先生。經学文章為世所顯。且於吾先祖退陶夫子。有蒙養訓迪之功。可謂肇基乎吾家家学。豈不韙哉」〔松齋先生集続集識〕トアリ。『退溪〔先生文〕集〔卷之四十五〕』「愚蒙如滉。郷里小生。登門質業。自彼府巖」。

独愛林廬万卷書。一般心事十年餘。邇來似与源頭会。都把吾心看太虚⁸。

『周易』ヲ読ムニ至リテ、独究窮思寝食ヲ忘レ健康ヲ害シ、爾後羸悴ノ疾ヲ得ルト云ノ二十七歳、進士ノ試ニ及第シ、母夫人ノ希望ニ由リテ科業ニ従事シ太学ニ遊ビ⁹、金河西ト締交シ、三十四歳文科ニ及第シ承文院副正字トナリ、正字ニ陞ル時ニ奸臣金安老一時権ヲ秉リ、彼ヲ悦バズ遜ス。幾クモナク金安老失脚シ、復出デテ官途ニ就キ、丁酉三十七歳十月母夫人ノ喪ニ遭ヒ、礼ヲ躅シ服闋リテ、三十九歳玉堂ニ入り経筵ニ侍ス。爾後官職順潮ニ進ミ、彼亦官事ヲ尽シテ他念ナシ。然ルニ、時中宗ノ末年ニ当リ、文定王后ト世子仁宗トノ間ノ關係ニテ事象甚穩ナラズ、機ヲ看ルニ敏ナル金麟厚ハ、癸卯年八月修撰ノ官ヲ以テ既ニ暇ヲ乞テ帰郷シ、一往返ラザルノ志ヲ示ス。彼之ヲ送リテ亦志ヲ述ベテ曰ク¹⁰、

我昔与子遊泮宮。一言道合欣相得。君知処世如虚舟。我信散材同枵櫟。富貴於我等浮雲。偶然得之非吾求。……秋風蕭々吹漢水。……海山千里君先去¹¹。

十月成均館司成ニ拝シ、乞仮省墓シ、其後屢々召サルレドモ、岳立シテ病ヲ以テ出デズ。是頃ヨリ彼ノ処身一変シテ消極的トナリ、辞退ヲ主トシテ出仕ヲ避ク。朴淳ノ撰セル誌銘、門人鄭惟一ノ撰セル「〔退溪先生〕言行通述」、皆是間ノ心事ヲ直写シテ、

先生本少宦情。又見時事有〔大〕機関。自癸卯始決退休之志。是時。先生年蓋四十三矣。自是以後。一意退帰。雖累被召還。常不久於朝」（鄭惟一「言行通述」）。

朴淳ノ墓誌銘「『思菴先生文集卷之四』退溪先生墓誌銘」ニハ彼ノ言ヲ引用シテ曰ク、

嘗曰。我之去就。前後似異。前則有召輒出。後則雖累被召命。不敢進。蓋位卑則責輕。猶可一出。官高則責重。豈不顧分義而冒進乎¹²。

中宗薨ジ、仁宗繼テ昇遐シ、明宗即位シ、生母文定王后ついで攝政トナリ、李芑・尹元衡権ヲ秉ルニ至リテ、世ハ復タ乱雜ニ陥リ、大獄連起シ、士流相踵デ禍ヲ蒙ル。彼モ危カリシ

8 奇心与太虚一般

9 退溪ノ泮宮就学ニ就テハ、一回ト二回ノ説アリ。（順庵某卷〔退溪先生年譜〕看）（是年譜三十三歳也）

10 『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、詩の引用に先立って、「此詩は彼の操守を知るに關係あり、詩亦絢爛縦横、壯年時の彼の文藻の盛を充分に發揮してゐる」という贊辭が付け加えられている。同書、五八頁。

11 『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、この引用文の前に「君不見鯢魚化作垂天翼。九万搏風竟奚適。下有區區斥鷃輩。搶榆控地皆真樂。又不見魏瓠種成実五石。不願為瓢憂瀟落。何況作尊浮江湖。卻笑莊生未甚達」が、同じく後には「君言欲作反哺鳥。乞得專城有蟹無監處。人生至樂君有之。具慶堂前舞綵衣。此外万事何足道。儻來軒冕如塵微。不羨圖凌雲。不須擁旌麾。子真巖耕名已振。原憲蓬居道非吝。須知王式本不來。莫怪邴曼終難進。送君歸搔我首。為君歌薄薄酒。相思莫惜寄玉音。我詩聊贈千金帚」が補充されており、「送金厚之修撰乞仮帰觀。仍請外補養親恩許之行」という詩の全文が掲載されている。同書、五八頁。

12 『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、この引用文は全て削除されている。同書、六〇頁。

ガ、幸ニ李芑ノ姪李元祿妾ト彼ヲ重ジ、為ニ其人トナリヲ弁ジテ、免官ニ止リ、纔ニ免ル、ヲ得タリ¹³。彼是ニ至リテ切ニ其退去ノ晩^{おく}レシヲ悔イ、明宗元年丙午乞暇還郷シ、病ヲ移^{より}シテ職ヲ解キ、其秋、養真庵ヲ退溪ノ東巖ニ勞テ築キ、自ラ退溪ト号シ、復タ世事ヲ願ハザルノ意ヲ示ス。戊申山水ノ勝ニ名アル忠清道丹陽郡守トナリ、後慶尚道豊基郡ニ転ジ、上書シテ白雲堂書院ニ扁額、書籍ヲ賜ル。李朝書院ノ濫觴タリ¹⁴。

13 『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、注記されていた以下の引用文の前半部分である「溪山記善録」の引用までが本文に書き込まれ、後半部分を省略する代わりに、「宜なり。爾後彼が、京城を嫌ふこと嶺海の如く、官場を畏ること刀山湯池の如きや。」が、書き加えられている。「当時如何ニ彼ノ身危カリシカ、又如何ニ元衡一派ノ禍網ヲ張ルコト周密ニ陰謀到ラザルナカリシカ、李良齋「溪山記善録」ニ記スル所、一節ニ徴ス可シ。「先生自言。吾乙巳年間。拜応校在玉堂。堂中一二人。言尹大妃不可垂簾。某曰。然則摂政者誰。曰、大臣。曰。不可。家有主母。豪奴悍婢。不可与弱子抗。况三代之後。人心不古。恐不当效周公之事。昔宋朝為相者。有若韓琦之賢。而亦未免垂簾之政。況於其下者乎。某須臾起如廁。二人坐夾室。呼景浩來。少年聽處。何以發此語如是乎。某曰、公言則某。不可隱黙。同席聽者。具陳於元衡輩。明日。二人即尽奪告身。繼之賜死。而独不及某。蓋必元衡輩疑其附己而棄之。元衡本与某同年。平生一不相問。心甚銜之。終無奈也」。独弟子ノ影響、時勢ノ不安ノ二原因、分テ明朝ニ到リテ、章楓山・莊定山・純東白・曹月川・羅整庵等深ク山林ニ藏修シテ官利世榮ニ澹泊ナリシ行蹟ノ、彼ヲ刺激シテ一危退藏ニ執着セシメシヲ遺スベカラズ。彼ノ著ニ『宋季元明理学通録』ノ未定稿アリ。宋元ノ儒者ハ広く網羅シ、明儒ハ楊廉月湖ノ『理学録』ニ詳述セルヲ見テ之ニ譲リテ、惟ダ曹月川・羅整庵トヲ略録スルニ止メテ、而テ月川・整庵共ニ志常ニ山林ニ在リシ人ナリ。又彼ノ章楓山ヲ思慕セルハ、彼ノ書状中ニ散見シテ疑ナシ。蓋シ是レ學問ノ愈々学究のトナルニ至レル明代ノ風尚ニシテ、偶々其素地ヲ有スル彼ノ思想ヲ一層力付ケテ確守実践シテ疑ハザルニ至ラシメシナリ。此ニモ朝鮮ノ思想上顯著ナル出来事ノ必ズ支那ノ影響ヲ其發生ノ原因トナス名証ヲ示ス」。同書、六〇-六一頁。

14 『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、注記されていた以下の引用文が本文に書き込まれている。「蓋シ当時既ニ李朝ノ学政漸ク文具ノ形式ニ流レ、各郷校ノ教職ハ、士大夫有識者流ノ賤視シテ以テ之ニ膺ルヲ恥ル所トナス。栗谷ノ『東湖問答』学政ヲ論ジテ、「今之学校之政。付之無可奈何之域。不求善策。故未見其效耳。非有功而無效也。今者。以訓導為至賤之任。必得貧困無資者而授其位。使免其飢寒。為訓導者。亦徒知侵漁校生以自肥而已。夫孰知教誨之為何事耶。」ト云ヘルガ如シ。稀ニ吳德溪ノ星神ノ教官トナルヤ、黃錦溪府使ト戮心協力シテ大ニ郷学ヲ振作セルアリシコト、具栢潭ガ權彦晦ニ与フル書ニ、「大概学職、雖曰冷官、日与士子同遊處、有教育英才之樂。以是先賢未嘗不別致意焉。〔如胡先生蘇湖之法。蓋其一也。敬守廟庭。獎進学徒。導以礼讓。勸以古人之学。使一境儒化倡行。以裨聖朝文明之治。豈淺淺事業而已也。〕吳德溪子強、嘗為此学。与黃錦溪。協心開講。其余教之流。至今猶存。不可不知也。」ト云也。其他鄭介清ノ羅州ノ訓導トナリ、師道ヲ尊嚴ニシテ教化遠近ニ布ケルガ如シ。是レ退溪ガ書院ノ説ヲ主張スル所以ニシテ、己酉年其「上沈方伯書」ニ、「混竊見今之国学。固為賢士之所関。若夫郡県之学。則徒設文具。教方大壞。士反以游於郷校為恥。其刑敝之極。無道以救之。可為寒心。」ト言ヒ、惟ダ書院ノ教ヲ興セバ、以テ此ノ名家教家ノ欠典ヲ補フベシトナス。本書、沈通源〔方伯〕朝廷ニ転上シ、明宗之ヲ先評シ、又大提学・申光漢ニ命ジテ文ヲ作りテ之ヲ記セシム。是実ニ李朝書院制度ノ濫觴ナリ。其後設置濫ニ流レ、村々里ニ書院アラザルナク、而シテ院長真摯ニ子弟ヲ教導スルヨリモ、之ニ出入ス

庚戌彼五十歳、兄瀧遂ニ士禍ノ犠牲トナル。彼益々世路ノ崎嶇ヲ悟リ、寸進尺退、任命召令アル毎ニ病ニ托シテ出デズ。即彼ハ中宗甲午廿九年ニ及第シ、其後十年、即癸卯ヨリ明宗十三年ノ戊午ニ至ル十六年間廿七回、或ハ辭職シ或ハ召命ニ応ゼズ。以後引続キ大官ニ拜セラルノ十数回ナルモ、多クハ許可ヲ得ズシテ退京帰郷シテ任ニ就カズ。然レドモ官位ハ驟々トシテ進ミ、五十二歳壬子ニハ通政大夫成均館大司政ニ陞リ、丙辰五十六歳ニハ弘文館副提学、戊午五十八歳末ニハ特ニ嘉善大夫ニ陞サレ、工曹參判ニ叙セラル。翌年早春、郷ニ帰り官ヲ辞シ、明宗即同知中枢府事ヲ授ケ、道ニ命ジテ菓餌食物ヲ給セシム。彼ハ此頃、学問工夫愈々蔗境ニ入り、弟子知人トノ道学ニ関スル往復弁論頗盛ナリ。

庚申六十歳晩、陶山書堂成り、自ラ又陶翁ト号ス。此ヨリ六十七歳迄、遂ニ京城ニ入ラズ¹⁵。明宗、彼ノ賢ニシテ学ニ^{ふか}邃キヲ聞キ、必ズ之ヲ附シテ左右ニ置カント欲シ、誠意ヲ

ル所謂儒生輩ノ横議シ飲食スル所トナリ、民瘦ヲナス。肅宗甲午、諸道ノ私建書院ヲ禁ジ、英祖辛酉ニハ大凡肅宗甲午以後ノ創設ニ係ル者ハ皆毀撤セシメ、最後ニ大院君戊辰年ノ大撤廢ニ至リテ大部分毀焚セラル。惟文廟從祀者及忠臣ノ書院四十八ヶ所ヲ残ス。然レドモ、書院ノ設置ニ由リテ所在蔵修シテ出デザル学者ヲシテ其ノ郷ノ子弟ヲ教授ニ膺ルノ機関ヲ作りシト、名賢尊崇ノ美風ヲ盛ニシテ、学者ノ窮理修養ヲ勸奨セシ効果ハ認メザルベカラズ。後世ニ至リテ生ゼル弊瘦ノ如キハ、物久シケレバ其当初ノ期待セル効驗ノ發達アリシモ、之ニ附帶スル弊害ノ愈々増大スル朝鮮ノ国情ノ致ス所ニシテ、必シモ制度其物ヲ咎ムルニハ当ラズ。況ヤ其首倡者退溪其人ヲヤ。現ニ退溪ヲ享祠セル陶山書院ノ存在ガ如何ニカ嶺南ノ学問ト人心教化ニ影響アリシカ。嶺南ガ李朝滅亡迄朝鮮ノ鄒魯トシテ文教ノ首地タリシハ、其地ニ於ル武守名賢、初享ノ書ニ人心ガ感孚シテ向学修養邁進セシ事ニ由ル故ナラズトセズ。書院ノ設置ハ、朝鮮教化機関ニ一時代ヲ画スル者ナリ」。なお、この注記の最後の部分、すなわち「況ヤ其首倡者退溪其人ヲヤ。現ニ退溪ヲ享祠セル陶山書院ノ存在ガ如何ニカ嶺南ノ学問ト人心教化ニ影響アリシカ。嶺南ガ李朝滅亡迄朝鮮ノ鄒魯トシテ文教ノ首地タリシハ、其地ニ於ル武守名賢、初享ノ書ニ人心ガ感孚シテ向学修養邁進セシ事ニ由ル故ナラズトセズ。書院ノ設置ハ、朝鮮教化機関ニ一時代ヲ画スル者ナリ」は、『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では削除されている。高橋の李退溪尊崇の念を表そうとした配慮の結果であろう。同書、六二―六三頁。

- 15 退溪処世ノ方針、進取ヲ棄テ、退守ヲ取り、以テ如是危激多事ナル当世ニ幸ニ無事ニシテ、以テ道学ニ対スル自己ノ天分ヲ竭サント決意シテ動かザルハ、彼ノ著『古鏡重磨方』ニ見ルベシ。此書ハ宣祖四年門人等ノ刊木スル所ニシテ、退溪ガ支那古來ノ諸箴銘中特ニ処世ノ指針トナスニ緊切ナルモノヲ集メテ、以テ日常ノ座右ニ供ヘシナリ。「湯盤銘」「武王席四端銘」「金人銘」ニ始リテ、韓退之・司馬君実〔光〕・程伊川・張横渠・朱子・真西山・張南軒、其他唐宋ノ名人ノ什アリ。其中、例ヘバ「金人銘」、崔子玉ノ座右銘、魏下蘭ノ座右銘、白樂天ノ座右銘、李至ノ続座右銘、劉禹錫ノ陋室銘、韓退之ノ五箴室ハ、皆進ヲ戒メ退ヲ勸メ取ヲ厭ヒテ不欲ヲ奨ス。李至ノ続座右銘ニ、「短不可護。護則終短。長不可矜。矜則不長。尤人不如己。好円不如好方。用晦則天下莫与汝争智。撝謙則天下莫与汝争強。多言者老氏所戒。欲納者仲尼所藏。妄動有悔。何如静而不動。大剛則折。何如柔而勿剛。吾見進而不已者敗。未見退而自足者亡。為善則遊君子之域。為惡則入小人之郷。吾将書紳帶以自警。刻盤盂而過防。豈如長存於座右。庶夙夜之不忘」ト云ヒテ、恰モ彼ノ為ニ^{もと}処世ノ道ヲ説スルガ如シ。蓋シ中宗明宗以來ノ李朝士禍ノ慘劇ハ終ニ彼ヲシテ処世ノ訓ヲ老氏ニ迄索

披瀝シテ屢々礼召ス。然而シテ彼ノ決意巖ノ如ク動カスベカラズ。明宗深ク之ヲ歎ジ、嘗テ招賢不至ヲ以テ題トナシテ、近臣二命ジテ詩ヲ賦セシメ、又窃ニ礪城尉宋寅¹⁶ヲシテ彼ヲ陶山ニ訪^{おとが}ヒテ、彼ノ祥瑞〔=遥〕得志ノ状ヲ描カシメ、之ヲ屏風ニシ、思慕ノ意ヲ寓ス。明宗二十年文定王后歿シ、尹氏一派失脚シ、明宗王銳意士論ヲ容レテ政教ヲ改革セントス。翌丙寅彼六十六歳、資憲大夫工曹判書兼弘文館大提学、芸文館大提学、知成均館事、同知經筵春秋館事ニ叙ス。而シテ彼病ヲ以テ辞シテ就カズ。又郷ヲ出デズ。

翌年六十七歳二月嘉靖皇帝〔明朝第十二代皇帝〕崩ジ、新帝即位シ、詔使將ニ至ラントス。大臣李浚慶等、啓シテ文学ノ士ヲ聚メテ応酬ニ備フ。王堅ク彼ノ出京ヲ要ス。六月京ニ入り、三日未ダ肅拜ニ及バズシテ、明宗王昇^{しょうか}遐シ、宣祖新ニ即位ス。七月大行王行状修撰庁堂上ニ任ジ、又礼曹判書兼同知經筵春秋館事ニ拜ス。一辞シテ允サレズ。再辞シテ允サレズ。翌月病ヲ以テ免ゼラレ、即時東帰ス。時論ノ彼ノ明宗ノ山稜葬事未ダ終ヘズシテ、強テ辞官帰郷セルヲ難^{こうこう}ジテ囂々タリ。彼ノ門弟奇高峰書ヲ遣^{つかは}シテ、彼ニ説ヲ求ム。彼之ニ答ヘテ、其心事ヲ披瀝ス。曰ク、

適得來書。責以古義。羞死何言。……某¹⁷之為人。不亦異乎。某之処身。其亦難矣。何也。大愚也。劇病也。虚名也。誤恩也。……以大愚而欲实虚名。則為妄作。以劇病而欲承誤恩。則為無恥。夫挾無恥。以行妄作。於德不祥。於人非吉。於国有害。某之不樂仕常退身。豈有他哉。……古之君子明於進退之分者。一事不放過。小失官守。則必奉身而亟去。彼其愛君之情。必有所大不忍者。然不以此而廢其去者。豈不以致身之地。義有所不行。則必退其身。然後可以徇其義。當此之時。雖有大不忍之情。不得不屈於義所揜也¹⁸。

要スルニ、彼ノ意ハ、到底當時ノ時務ニ対シテ体力才力共ニ担当スルノ資格ナキガ故ニ、強請シテ官職ヲ免ゼラレ、一旦既ニ免ゼラル、以上、寸時モ京城ニ留マルハ其ノ義ニ非ズ。宜シク速ニ帰郷スルヲ以テ出処ノ法トナスベシトナスナリ。本書ハ彼ノ出処進退ニ関スル年来ノ意思ヲ総算ノニ発表セルモノニシテ、従前幾十篇ノ同種ノ往復書中、最真摯ナルモノナリ。サレドモ是時彼ノ出処ニ付キテハ相当ニ士流間ニ議論アリ。彼ノ学徳ニ敬服スル李栗谷ハ退溪ノ意志ヲ諒解シ、処身誼ニ合ストナスガ如クナルモ、『石潭日記』ニ

ムルニ至ラシメシナリ。

16 宋寅。号頤菴。善詩風流貴公子也。『松溪漫録上』録頤菴贈西原妓詩曰。臨分解帶當留衣。教束纖腰玉一圍。想得粧成增宛轉。被他牽挽入羅幃。

17 『退溪先生文集』卷之十七「書」答奇明彦の原文では「混」となっている。高橋は、以下同様に「混」をすべて「某」に書き換えている。

18 『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、また後段の「瀕死之疾而當大任。人知其決不可為。是以。一不仕而五乞辞。蒙恩得解矣。是其在先朝而無狀如彼。當新命而負恩又如此。將何顔以自廁於羣臣之列乎。」の部分が省略されている。これも、高橋の李退溪尊崇の念を表そうとした配慮の結果であろう。同書、六四-六五頁。

当時ノ感想ヲ記シテ曰ク¹⁹、

礼曹判書李滉。解官帰郷。滉累辞以病。乃許遞職。明日滉不辭朝而帰。議者或以山陵日迫。不会葬而徑帰为非〔矣〕。蓋滉学問精詳。人以大儒目之。望其輔幼主致太平。而滉自謂無經濟才。故難進易退如此。

之ヨリ先甲子年中、彼ハ特ニ栗谷ニ私書ヲ致シテ、其彼ノ窮地ヲ救済センコトヲ懇請セリ。窮地トハ、虚名いたづら徒ニ世ヲ動シテ、経筵左右ノ臣等ガ機サヘアレバ盛ニ彼ヲ召出スコトヲ国王ニ啓シ、為ニ官位逐年陞リ渥命月ニ優〔ニ〕全ク身ヲ眞クニ所ナキヲ謂フナリ。書中ニ、

就中似聞時賢皆知滉無復仕進之理。然猶往往於榻前拈出。因致滉如此顛沛。憂懣之極。無如之何。当今可以脱略時論。援摠古義。明達宸旒。以救此絆繫之勢。惟公能為之。何故熟視老病。故旧落在深井中。而不一引手出之耶。千万懇懇。情在所急。

彼ハ同様ノ懇請ヲ時相・李浚慶ニモ致セリ²⁰。サレドモ、彼ノ難進ノ意如斯ク堅キニ拘ラズ、其学者タルト賢者タルトノ名声ハ隠然トシ閩国ヲ動カシ、国王ハ九重ニ坐スレドモ、始終雷鼓あきら耳カニ響轟とどろクガ如シ。奇傑ヲ以テ聞ユル白仁傑ハ、庚午四月兵曹判書タル時上疏シテ五大事ヲ陳ベ、其第四ハ則請召李滉ナリキ。『石潭日記』戊辰四月洪暹ヲ以テ右議政トナスヤ、附記シテ、

暹有文名。無操守。容身保祿而已。是時輿望。属于李滉。召命重疊。滉不至。乃以暹ト相。士林失望²¹。

19 以李滉為礼曹判書。滉守道山樊。人望日重。明宗累召不至。末年召滉接待華使。滉乃至。未及拜命。明宗升遐。滉在朝撰明宗行狀。及拜宗伯。乃辞以疾。上曰。聞卿賢德久矣。如此新政之時。卿若不仕。豈安於心乎。宜勿辞。滉終無供職之意。李珣謁滉曰。幼主初立。時事多艱。揆之分義。先生不可退去。滉曰。道理雖不可退。以吾身視之。不可不退。身既多病。才亦無能為也。時成渾為參奉而不來。座客有言。成渾何以不來。珣曰。成渾多病不堪從官。若強之〔仕〕。則是苦之也。滉笑曰。叔獻。何其待成渾厚而待我薄耶。珣曰。不然。成渾之仕。若如先生。則一身私計不足恤也。使渾趨蹌末官。何補於国。若先生在經席之上。則為益甚大。仕者為人。豈為己乎。滉曰。仕者固是為人。若利不及於人。而思切於身。則不可為也。珣曰。先生在朝。假使無所猷。而上倚重。人情悅賴。此亦利及於人也。滉不肯。〔『栗谷先生全書』卷之二十八『経筵日記』〔明宗大王〕二十二年〕。既ニシテ彼遂ニ朝ヲ辞セズシテ帰郷スルヤ、論ジテ曰ク、

20 『高橋亨朝鮮儒学論集』所取「李退溪」では、以下の注記が本文中に書き込まれている。「是時如何ニ彼ガ退京帰郷ヲ急ギシカ、彼ノ人ニ語ル所ヲ李良齊「溪山記善録」ニ録シテ曰ク、「先生己己之退。言於人曰。吾在都中。病益深痼。日且寒沍。每念田〔画〕隱黙。」官京師遇寒疾。不汗五日必死。豈獨嶺海之外能死人之語。常以死於城中為懼。未嘗一日安寝。及出都門。心目暫開。因自慰之曰。此後雖死於道中。何恨之有。」彼ガ中心京城ノ地ヲ厭ヒシヲ見ルベシ」。同書、六六頁。

21 『高橋亨朝鮮儒学論集』所取「李退溪」では、この後に「尹斗壽の『梧陰遺稿』「雑説」にも、当時退溪の士林間の人望を述べて曰く、退溪入来大夫朝夕候其門。争相現謁。退溪一皆接見。小無閑歇。最後。往見李相原吉。李相曰。公之入城已久。何不早為相見耶。退溪答以接遇無閑之事。李相顰蹙曰。往在己卯。士習如是。其間亦有羊質虎皮。終有媒禍之端。如趙靜菴外。吾不取也云。彼の

宣祖有為ノ資ヲ以テ新ニ即位シ、賢ヲ致サンコトヲ思フコト切ナリ。

元年戊辰正月、崇政大夫ニ^{のぼら}陸セ、議政府右賛成ニ拜ス。固辞ス。然レドモ召命愈々篤ク、七月遂ニ都ニ入ル。都人識ルト識ラザルト、大賢出来ルトナシ、額手シテ相慶ス。大提学知経筵ニ拜シ、期待スル所甚厚シ。彼上疏シテ六条ヲ述ブ。一曰、重継統以全仁孝、二曰、杜讒間以親兩宮、三曰、敦聖学以立治本、四曰、明道術以正人心、五曰、推腹心以通耳目、六曰、誠修省以承天愛。王之ヲ嘉納ス。其後時ノ経筵ニ侍シテ、講学啓沃スル所アリ。然レドモ、志常ニ山林ニ在リ。王心益々^{あつ}渥クシテ、退意益々^{かた}牟シ。十二月ニ至リ、最後ノ奉公ノ意味ヲ以テ、『聖学十図』並『箴子』ヲ上ル。王嘉納シ、屏風ヲ作りテ日々講究シテ措カズ。

翌年、吏曹判書²²ニ拜シ、辞シテ受ケズ。又^{しきり}頻ニ田里ニ放帰セシメラレンコトヲ乞フ。偶々文昭殿ノ議起ル²³。前ニ仁宗薨ゼル時、尹元衡等文定王后ニ媚ビテ、仁宗神位ヲ文昭殿ニ祀ラズシテ、別殿ナル延恩殿ニ附ス。何トナレバ仁宗ヲ文昭殿ニ祀レバ、諸侯五室ノ制ニ依リ、太祖ト、世祖・睿宗ノ成宗・中宗ノ高・曾・祖・考、四位ノ中、世祖ハ祧スベキニ至レバナリ。明宗朝既ニ之ニ就テ士論痛憤アリ。明宗亦嘗テ仁宗ハ当ニ文昭殿ニ附スベキモナルヲ言ヘル事アリ。

是ニ於テ宣祖新元ノ初、是議起ル。退溪翰林史官等ト共ニ文昭殿ヲ^{はし}靱メシ『世宗実録』ト『文昭殿儀軌』トヲ精密ニ調査シテ、支那古代ノ礼書及宋代ノ慣例ニ照シテ、『廟図』及『箴子』ヲ^{たてまつ}上ル。退溪ノ意見ハ、仁宗ヲ附入シテ世祖ヲ祧スベキハ勿論ナルガ、明宗モ亦附入スベキガ故ニ、東偏ニ新ニ一間ヲ立テ、以テ明宗神位ヲ奉安シ、斯クテ室ハ六ナルモ、仁宗明宗ハ兄弟ナルガ故ニ、代ニ於テハ依然四代トナリテ、諸侯五室ノ制ノ意ニ違ハズ。但シ李朝ノ文昭殿ハ世宗廟ノ当初ヨリ、太祖ハ北ニ居リテ南向シ、昭二位ハ東ニ在リテ西向シ、穆二位ハ西ニ在リテ東向ス。而シテ二廟制、南北短ニ東西長シ。若シ仁宗・明宗ヲ入附²⁴

然ルニ朱子『周礼』九図・『宋礼』一図に拠レバ、礼ハ必ズ東向トナス。故ニ是際、五神主ノ位置ヲ改置シテ、太祖ハ中央ニ在リテ西壁東向シ、睿宗・中宗ノ二昭南ニ在リテ北向シ、成宗・仁宗・明宗ノ三穆ハ北ニアリテ南向スルコト、セント²⁵。然ルニ、相臣等彼

人望京城士林を傾け、遂に彼の老友知己たる大臣・李浚慶をしてさへも警戒せしめた程であつた。併し彼の是の人望を得たるは、他人の之を得るとは異なり、其の学其の徳の自ら致す所であつた。」が挿入されている。これも、李退溪に対する尊崇の念の強調であろう。同書、六六-六七頁。

22 『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、この語句の前に「政府ノ最要職トモ謂フベキ」が挿入されている。同書、六八頁。

23 『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、この後に「彼以テ国家祀礼ノ大事トナリテ、特ニ鍊思シテ上書シタ」(『退溪先生文集卷之七』啓議「擬上文昭殿議」)が挿入されている。同前。

24 セントスレバ、更ニ南ヲ補テ加設ノ位ヲ容レザルベカラズ。

25 スクスレバ、礼ノ住地古礼ニ従ヒ、又殿ノ南ヲ補フノ必要ナキニ至ル。

ノ説ヲ以テ世宗ノ孝思ヲ遺^{わす}レテ、百四十年常行ノ制ヲ一朝ニ改易スル者トナシ、反対シ、議遂ニ行ハレズ。彼甚以テ恨ムベシトナシ、李栗谷亦之ヲ慨シテ曰ク、

今之望有為者。其計左矣。如欲有為。当有變革。今者百四十年已設之位。尚不可遷。則況百四十年已行之法乎。窮則變。變則通。今者窮而不變。吾不知之矣²⁶。

彼婦志愈々堅シ。三月判中樞府事ニ拜シ、夜入闕対座シテ王ノ所問ニ^{こたへ}対リ。或ハ道学ニ関シ、或ハ王者ノ用心ニ関シ、或ハ臣下ノ人物ニ関シ、縷々知りテ言ハザルナシ。其ノ大要ハ、『聖学十図』ニ就テノ説明ト、王ノ士林ヲ愛護スルヲ望ムト、李浚慶ガ大事ヲ託スベキ社稷ノ臣タルト、奇大升ガ学者トシテ当代随一ナル等ナリキ。李栗谷ノ人物藻鑑ハ彼ト大ニ異リ、故ニ彼ノ最後ノ應對ニ就テ頗ル^{あきた}慊ラズ。彼京ヲ辞スルヤ、大賢老臣ヲ送ラントテ、祖餞ノ筵席、朝野名流ヲ傾ケ²⁷、翌年上書懇請スルニ致仕ヲ許サレンコトヲ以テシ、王允サズ。而シテ道業一日トシテ之ヲ廢セズ。奇明彦〔大升〕トノ間屢次理学ニ関シテ往復アリ。十一月九日、時祭ヲ以テ温溪ノ宗家ニ至リテ齋宿シ、寒冒ヲ感ズ。然レドモ、祭ヲ終ヘテ家ニ歸リ、荏苒トシテ癒エズ。十二月二日ニ至リ疾革ル。翌日痢泄ス。盆梅其側ニ在リ。命ジテ他処ニ移サシメテ曰ク、

於梅兄不潔。心自未安耳。

子弟ニ命ジテ、諸人ノ書籍ヲ録還シテ遺失ナカラシメ、孫ノ安道ニ命ズルニ、慶州本『心経』板本中ノ訛舛ヲ釐正スルノ事ヲ以テシ、四日兄子穉ニ命ジテ、遺戒ヲ書セシム。曰ク、

一、母用礼葬。該曹循例請用。必称遺令陳疏固辞。一、勿用油蜜果。一、勿用碑石。只以小石書其前面云。退陶晚隱真城李公之墓。其後堆略書鄉里世系志行出処。大概如家礼中所云。此事若托他人製述。相知如奇高峯。必張皇無実之事。以取笑於世。故嘗欲自述所志。先製銘文。其餘因循未畢。草文藏在乱草中。搜得用其銘可也。一、先世碣墓未畢至。此為終天之痛。然諸事已具。須稟於家門而刻立焉。一、人之觀聽。四方環立。汝之行喪。非他例也。凡事必須問於人。家門鄉里中幸多知礼有識之人²⁸。其餘処置家事数条。（『言行録』李安道）

是日午後、諸生ヲ見ント欲ス。子弟之ヲ止ム^{とど}レドモ、彼、死生之際。不可不見。

ト言テ、上衣ヲ加ヘテ之ヲ引見シ、語りテ曰ク、

平時以謬見与諸君終日議論。是亦不易事。（同、李徳弘）

26 『栗谷先生全書』卷之二十八「経筵日記」隆慶三年己巳より。

27 『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、この後に「帳幕は南大門から漢江まで続いた。」が挿入されている。

28 『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、この後に「広詢博議、庶幾宜於今而不遠於古可也。」が挿入されているが、『斯文』掲載文にはこの挿入がない。編者によって『退溪先生言行録』巻五から補充されたものと思われる。同書、七〇頁。

七日、李徳弘ヲシテ占筮セシムルニ、謙卦「君子有終」ノ辞ヲ得。弟子卷ヲ掩テ色ヲ失フ。翌朝命ジテ盆梅ニ灌ガシム。忽ニシテ白雲宅ヲ罩メ、雪下ルコト寸許。須臾ニシテ彼命ジテ臥席ヲ整シメ、扶ケ起サシメ、坐シテ逝ク。即雲散ジ雪霽ル。享年七十歳。

訃聞エ、宣祖震悼シ、朝ヲ輟ムルコト三日。大匡輔国崇祿大夫議政府領議政兼領經筵弘文館芸文館春秋館觀象監事ヲ追贈ス²⁹。之ヨリ先、王彼ノ疾革マルヲ聞キ、内医ヲ遣シ、藥ヲ齎シテ救シム。未ダ到ラズシテ、彼逝ク。葬儀、一二第一等領議政ノ礼ニ遵ヒ、士大夫儒生ノ会葬スル者三百余人。門人等葬礼ヲ尽シ、金富弼・金富儀・金富倫・趙穆・琴応夾・琴応堉・琴蘭秀等ハ心喪三年ヲ持ス³⁰。

万曆四年十二月、贈諡シテ文純ト曰フ。万曆元年、伊山書院二位版ヲ奉安シ、翌年書院ヲ陶山ノ南ニ建テ、翌年額ヲ陶山書院ト賜フ。光海君二年、金寒暄堂・鄭一蠹・趙靜庵・李晦齋ト共ニ、文廟ニ從祀セラル³¹。

彼ニ二子アリ。長寓、官軍器寺僉正ニ止ル。次男案、早没ス。寓ノ子三人、安道、純道、詠道、是ナリ。安道、号衆齋、官司醞署直長ニ止ル。学徳アリ。世人或ハ目スルニ、退門ノ子思ヲ以テス。大成ニ至ラズシテ年夭折ス（月次祭文）。四伝シテ守淵、号青壁ナル者アリ。時ノ監司、其ノ家学ヲ紹述スル所以ヲ以テ啓シテ翊賛ヲ授ケラレ、莊献世子代理中、遺逸ヲ以テ之ヲ表旌ス³²。十世ノ孫彙載、号雲山ニ至リテ、学徳ヲ以テ名アリ。進士（南行）ヲ以テ仕ヘテ漢城右尹ニ至ル。乙亥（明治八年）卒ス。『雲山文集』十三卷アリ。往々道学ノ微ヲ著ス³³。

退溪一生、官情澹泊ヲ以テ始終ス。其ノ生活ニ於テ亦之ニ似タリ。『言行録』卷三「飲食衣服之節」ヲ録ス。其ノ生計ノ枯淡、常人ノ堪ヘ得ザル所ヲ持シテ夷然タルヲ云フ。金誠一ノ録ニ曰ク、

先生対客飲啖。不聞匙箸之声。其飲食之節。每食不過數三品。〔暑月。只脯乾而已。〕

29 『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、この後に「蓋し臣下として絶頂の位官である」が挿入されている。これもやはり、高橋の李退溪尊崇の念を表そうとした配慮の結果であろう。同書、七一頁。

30 『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、以下の注記が本文中に書き込まれている。「彼ノ葬儀ニ際シテ、朝廷ノ使臣タリシ彼ノ門人ノ一人タル金就礪ハ使命ヲ奉ジテ、儀礼ヲ盛大ニセント欲シ、左右ノ門人等ハ遺言ヲ奉ジテ殆ド処士ニ葬ラントシ、其ノ議頗ル紛々タリ。事ハ『謙庵〔先生文〕集』〔卷之四〕「記師門喪葬時〔事〕」ニ詳ナリ。同書、七一頁。

31 『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、この後に「彼を主享し若くは配享する書院は全道四十余ヶ所に上る。」が挿入されている。やはり、高橋の李退溪尊崇の念を表そうとした配慮の結果であろう。同書、七二頁。

32 『退溪続集』八卷〔『退溪先生続集跋』〕ニ、守淵〔六代孫〕ノ拾積数十年哀輯セル所、跋文ニ明ナリ。（英祖廿一年丙寅庚子）

33 『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、この後に「今の主人は李忠鎬といふ。一三世である。」が挿入されている。

……。嘗侍食陶山。盤中只有茄葉、菁根、海薺。無餘物矣。

又、禹性伝ノ録ニ曰ク、

先生嘗入京。寓西城内。今左相權公（轍）來見焉。先生具飯待之。淡饌薄味不可食。而先生若淡珍味。少無難意。權公竟不能下箸。退謂人曰、従前誤養口体。到此甚可愧也³⁴。

金誠一ハ彼ノ直話ヲ録シテ曰ク、

先生嘗曰。我真福薄之人。啖厚味。則氣如痞滯不安。必啖苦淡。然後方利腸胃。酒量素ト寛。中歳痛戒、断ジテ大酔ニ至ラズ。蓋シ、彼ガ天性淡薄ノ野味ヲ愛シ、之ヲ食シテ、乃能ク其ノ腸胃ニ適順セルカ否カラ詳ニセズト雖モ、彼ノ如キ処世ノ道ヲ取ラントスレバ、居常飲食ノ節ニ於テ淡薄ニ馴レシムルハ第一ノ用心極ニシテ、寧口名利ニ淡タラントスル者ノ、最モ肝要ナル修養ト謂ハザルベカラズ³⁵。古來東西名利ノ士、一朝富

34 退溪ノ京城ノ寓居ハ西小門内ニ在リ。栗谷ノ弟子・尹耆献ノ『〔長貧居士〕胡撰』ニ一奇話ヲ^{つたへ}伝リ。曰ク、西小門内ハ退陶先生旧第。即今觀象監借寓之所是已。庭有老檜一樹。壬辰兵火之後。尚今蒼鬱。行者亦皆瞻仰。歳辛亥。嶺右人有上疏訾毀先生者。八方章甫之士。皆詣闕訟辨。太学生〔等〕亦再空芹泮。一日風雨大作。檜樹亦為摧折。此亦時運之變耶。異哉。

35 この部分には、明の朱謙撰『活人心方』〔退溪自身による筆写遺墨もある〕から、以下のような長大な引用文が注記されている。当時、高橋自身が『活人心法』にいかにも強い関心を持っていたかを物語っている。「謂常存救人之心。欲全人之生。同歸於寿域也。豈小補哉。然世之医書。各家所編者。何暇千本紛然。然雜具徒多無補。但此書方雖不多。皆能奪命於懸絕。雖司命莫之神也。凡為医者。而能察其受病之源。而用之止此一書。医道足矣。人能行其修養之術。而用之此一書。遷道成矣。何況不寿乎。士之於世。不可欠焉。

活人心 中〔保〕和湯ノ処方アリ。曰ク、專治医所不療一切之疾。服之保固元氣。邪氣不侵。万病不生。可以久安長世而無憾也。思無邪 行好事 莫欺心 行方便 守本分 莫嫉妬 除狡詐 務誠實 順天道 知命限 清心 寡慾 忍耐 柔順 謙和 知足 廉謹 存仁 節儉 虛中 戒殺 戒怒 戒暴 戒貪 慎篤 知機 保愛 恬退 守靜 陰隲 右三十味咬咀。為末用心火一斤水二碗。漫火煎至五分。連渣不拘時候温服。

和氣丸

〔忍〕 心上有刃。君子以含容成德。川下有火。小人以憤怒殞身。

專治大人小兒。一切氣蠱。氣脹咽喉。氣塞胸滿。氣悶肚腹。氣滿遍身。麻痺咬唇。切齒瞋目。握掌面紅。耳赤忽若火燎。已上医所不療之氣。並皆治之每服一九。用不語唾嚙下。

〔六字法〕

太白真人曰。世人誦經。皆欲福免災。往々口与心違。徒誦何補。是求其外。而不求其内也。若使念經有益。道士盡為仙。和尚盡為仏。予有三部經。只六個之字。經文雖簡而功德甚大。但要至心奉行。或人來問。予曰一字經忍字是也。二字經方便是也。三字經依本分是也。這三部經不在大藏。只在靈台方寸中。人々皆有不問賢愚。不問識字不識字。皆可誦。若人能志心受持。病亦不生。災亦無有。自然獲福。若不在其身。必在子孫矣。

養生〔之〕法

脾好音樂。夜食多則脾不磨。周礼曰。樂以侑食。蓋脾好音声。糸耳耳纔聞。即磨矣。是以音声皆出

貴窩裏ニ墜落シテ、終ヲ令クスル能ハザル者アルハ、此ノ修養ヲ欠キ、佳味軽暖ノ習慣ヲシテ、我一身ヨリ施テ我家眷ニ及到ラシメ、之ヲ脱スル能ハズ。躊躇逡巡ヲ以テ機ヲ逸シテ、末路悲惨ヲ致ス者益々多ク、皆是ナリ³⁶。

於脾。而夏月夜短晚飯少喫。尤宜忌之。恐難消化故也。酒雖可以陶情性通血脈。自然招風敗腎。爛傷腐脇莫過於此。飽食之後。尤宜戒之。飲酒不宜。麤及速。恐傷肺。肺為五臟之華。蓋尤不可傷。當酒未醒。大渴之際不可喫水。及啜茶多被酒引入腎臟。為停毒之水。遂令腰脚重墜。膀胱冷痛。無水腫消渴攣蹙之疾。大抵茶之為物。四時皆不可多喫。令人下焦虛冷。唯飽食之後。喫一兩盞不妨。蓋能消食故也。飢則尤宜忌之。凡坐臥處。始覺有風宜速避之。不可強忍。且年老人體竭內疎。風邪易入。始初不覺久乃損人。故雖暑中不可當風。取涼醉後操扇。昔有人學得壽之道於彭祖。而苦患頭痛。彭祖視寢處。有冗當腦後。遽令寒之後。遂無患。五味稍々薄。令人爽神。稍々多。隨其臟腑。各々有損傷。故酸多傷脾。辛多傷肝。鹹多傷心。苦多傷肺。井多傷腎。此乃五行自然之理。初傷不覺。久乃成患不淺。

久視傷心損血。久坐傷脾損肉。久臥傷肺損氣。久行傷肝損筋。久立傷腎損骨。孔子所謂居必遷坐以是故也。人之勞倦有生於無端。不必持重執輕。乞乞終日惟是。閑人多生此病。蓋閑樂之人不多運動氣力。飽食坐臥。經脈不通。血脈凝滯使然也。是以貴人貌樂而心勞。賤人心閑而貌苦。貴人嗜慾不時或昧於忌犯。飲食珍羞便乃寢臥。故常須用力。但不至疲極。所貴英衛通流、血脈調暢。譬如流水不污、戶樞不蠹也。」さらに、ここに書き込もうとしてスペースがなかったためか、前頁に、以下のような『活人心方』「導引法」から体操の説明文が引用されている。

体操 毎日午後午前各行一次或昼夜共三次

- 一、叩齒集神三十六、両手抱崑崙、雙手撃天鼓二十四。
- 一、左右手揺天柱各二十四。
- 一、左右舌攪上顎腭三十六漱、三十六分、三口如硬物嚙之、然後方得行次。
- 一、両手摩腎堂三十六、以数多妙。
- 一、左右単関轆轤、各三十六。
- 一、雙関轆轤三十六。
- 一、両手相槎当呵五呵、後又手托天、按頂各九次。
- 一、以両手如鈎向前、攀雙脚心十二、再収足端座。

なお、『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」には、『活人心方』「導引法」に掲載されている挿図も採録されている。

36 『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、この後に「但し彼の澹泊生活は、清貧に安ずる心掛からのみならず、又養生法からしても来る所あるが如くである。退溪は晩年、殊に養生に留意して、之に関する書籍を涉猟し、自ら之を實踐し、又人にも之を授けた。今彼の宗家に伝はる先祖遺墨中に彼の自筆の『方』一卷があり、仔細に養生の心法から薬方及び体操まで説明し、殊に体操は綿密に一々図を描きて、其の方法を示してゐる。退溪の此の養生法重法は、彼の門人等に向ても影響を与へ、高弟柳西厓の如きもいたく此方面に留意し、遂に鍊丹術の攻究にまで及んだ。」という記述が挿入されている。同書、七三頁。それに対して、高橋の講義ノートでは、この部分に以下の説明および「活人心序」からの引用が注記されている。「然レドモ、退溪生活ノ澹泊ナルハ、独リ清貧ニ安ズルノミナラズ、又養生法ヨリ来レルコト疑フベカラズ。退溪ガ晩年、殊ニ養生ニ留心シテ、之ニ関スル書籍ヲ涉猟シ、自ら之ヲ実践シ、人ニモ授ケンハ、今モ退溪ノ宗孫、礼安陶山里

退溪ノ生活、淡泊清貧是ノ如シ。但彼ガ山水ノ自然ヲ愛シ、居ヲ得意ノ境ニトシテ、此ニ從徭シ、此ニ読書シテ、其ノ志ヲ乱スコトナカラント欲セルハ、人品ノ高雅、古人ニ恥ヂズト謂フベシ。彼ノ壯年、亦タ乞ヒテ丹陽郡守トナレルハ、丹陽龜潭ノ形勝ヲ愛シタレバナリ。次デ、先謙ノ監司タルヲ避ケテ、豊基郡ニ転ゼル。亦、小白山ノ名山タルヲ以テナリ。兩郡ノ勝景、彼ノ詩文ニ由リテ益々顯ル。彼五十歳ニシテ尚家ナシ。其二月、始メテ退溪ノ西ニト居シ、喜デ志ヲ述ベテ、

身退安愚分。学退憂暮境。溪上始定居。臨流日有省。

五十七歳、書堂ノ地ヲ陶山ノ南ニ得³⁷、之ニ経営ノ望ヲ起シ、六十歳ニ至リ、始メテ成ル。自ラ陶翁ト号ス。堂三間、軒ヲ巖栖ト曰ヒ、齋ヲ玩樂ト曰フ。精舎七間、^{なづ}名ケテ隴雲ト曰フ。後学徒³⁸四方ヨリ来ルヤ、議シテ精舎ノ西ニ室ヲ築キテ処リ、亦樂ト命ズ³⁹。是ニ至リテ、彼居処安定シ、志伸ビ、体胖ニシテ日夕図書ヲ左右ニシテ子弟ニ教学シ、老将ニ至ラントスルヲ知ラズ。真ニ、富貴我ニ於テハ浮雲ノ如キ境涯ニ入レリ。書堂ノ前ニ川アリ。清瀬深潭、以テ舟ヲ行ルベク⁴⁰、巖石盤陀、以テ坐シ以テ筵スベシ。彼、清夜涼夕、其愛スル所ノ子弟ヲ伴ヒテ、或ハ流ヲ遡リテ、赤壁ノ遊ヲ撫シ、或ハ袖ヲ翻シテ、舞雩ノ趣ヲ追フ。是地今尚山木蒼々、流水滄凌、当年高人藏修ノ迹ヲ偲ブニ足ル。蓋シ山水径奇突出ノ態ナシト雖、清幽邃^{けい}トシテ俗塵ヲ惹カズ。翠松古柏三百有余年ノ郷人ノ愛護ヲ得。山禽樂鳴ト相俟チテ、山容水態猶得意ニシテ足ラザルナシ。徳人ノ化、長ク衰ヘザルヲ証ス。李徳弘、録シテ曰ク、

ノ李忠鎬ノ学習スル先祖遺墨中ニ、自筆『活人心方』ノ一卷アリ。仔細ニ養生ノ心法ヨリ、薬方及体操ニ及ビテ説明セルニ徴スベシ。退溪ノ是ノ養生法ノ重法ハ、其門人ニモ影響ヲ与ヘ、西厓ノ如キハ、晩年亦甚ダ是方面ニ留心シ、進ンデ鍊丹術ニ迄及ベリ。退溪ノ「活人心序」ニ曰ク、昔在太昊之先。軒岐未曾有。太乙氏之王天下也。調泰鴻之炁。薄滋味。寡嗜慾。修長生久視之道。其修養之法已有矣。巢氏。搏生咀華。以和氣血。藥餌之說。已有矣。陰康氏時。水瀆陰凝。民疾重墜。乃制舞。以疏氣血導引之術。已有矣。故人無夭傷。太朴既散。民多疾厄。厥後。軒轅氏作。岐伯氏。出而有醫藥之方。行焉。故聖人治於未病之先。医家治於已病之後。治於未病之先者。曰治心。曰修養。治於已病之後者。曰藥餌。曰砭熨。雖治之法有二。而病之源則一。未必不由因心而生也。老子曰。心為神主動靜從心。心為禍本。心為道宗。靜則心君。泰然。百脈。寧謐。動則血氣昏亂。百病相攻。是以。性靜則情逸。心動則神疲。守真則志滿。逐物則意移。意移則神馳。神馳則氣散。氣散則病生。病生則殞矣。雖常俗之語。最合於道妙。今述其二家之說。自成一家新話。編為上下二卷。目之曰活人心。」

37 山小清秀、其生平ノ求ムル所ニ合ストナシ、

38 『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、「学徒」を具体的に「門人安東の富人の子鄭士誠」と記している。同書、七四頁。

39 『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、この後に「後「童蒙齋」と改め、諸生の寄宿舎に宛てた。」が挿入されている。同前。

40 『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、この後に「以て綸を垂るべく、流に臨んで」が挿入されている。同前。

若有山水明麗。瀑布流處。無不抽身獨往。玩詠而還。

庚午（七十歲）九月〔菊月〕。〔德弘〕携一二〔率二三〕童冠。先遊伊洞。歸路。蒼頭來報先生已入烟霞中矣。弘欣欣而進。先生独坐丹楓下澗石辺。笑曰。君已還邪。酒一行。講義理。明日。贈詩二絶云。野菊時聞撲馬香。幽尋泉石傍斜陽。欲呼君去同遊賞。人道君先入杳茫。王母城前少有天。丹楓碧澗映寒烟。何當鑿出瑤池水。滿種蓮花更可憐。

ト。サレドモ、退溪ノ山水ヲ樂ムハ、静ニ之ヲ樂玩スルナリ。其境ニ逍遙シ、微吟諷詠シテ、我ガ性情ニ契ル其ノ山容水態ノ真趣ヲ味フナリ。是点ニ於テ花潭ノ山水ヲ喜ブト異ル所アリ。花潭ハ山水ノ佳境ニ逢ヘバ、即狂喜シテ、起チテ舞ヘリト云フ。退溪曾テ評シテ曰ク、

求而有所得。其樂不可勝。孔子之言曰。發憤忘食。樂而忘憂。不知老之將至。程伯子之言曰。吟風弄月以歸。有吾与点也之意。此類甚多。然未聞真起身以舞也。孟程所謂手舞足踏。亦言不勝其樂之意耳。惟邵康節詩曰。儘快意時仍起舞。又云真樂攻心不奈何。晦菴嘗譏之曰。若是真樂。安有攻心。竊恐此康節之所以為康節。而有異於程朱也⁴¹。

即、康節ト程朱ノ人物ノ相異ナル所ハ、即花潭ト退溪ノ性格殊ナル所ナリ⁴²。彼ガ花木

41 『退溪先生文集卷之三十二』書「答禹景善問日近思錄」より。

42 彼ノ生活ハ真ニ山林大儒ノ学究の生活ノ模範ニシテ、孜々トシテ学ニ精励シ、孳々トシテ弟子ヲ教ヘ、夜以テ日ニ継ギ、造次顛沛モ一念学ヲ去ラズ。後世ノ吾人ヲシテ之ヲ思ヒテ忸怩トシテ面赧ナルヲ覺エシム。其詳細ナル叙述ハ「溪山記善録」中ノ一節ナリトス。「丙寅十月日。先生在溪堂。作記夢詩。仍手書与德弘曰。我夢尋幽入洞天。千巖万壑開雲煙。中有玉溪青如藍。泝洄一棹神飄然。仰看山腰道人居。行穿紫翠如登虚。迎人開戸一室清。髣髴何年吾所遊。壁上舊題留不留。屋辺剝木飛寒泉。团团桂樹枝相樛。同來二子顧且歎。結屋永擬遺塵絆。忽然欠伸形遽遽。鷄呼月在南窓半。不聞數日。先生忽作月澗之行。即二十四日也。德弘与琴悌筭先往待之。俄而先生上考槃台。久之。以風入庵。時幹僧庸懶。收秋事於台上。心甚未便。頗欲逐之。而從容言曰。浮屠輩如是邪。阿淳隨之而未及。使童子壘渡水之安否。安則即報云。夜來默然兀坐。移戌而寢。僅子而起。呼兒明燭。誦晦菴書。俄頃就寢乃興。朝來。德弘質心經天命及潜雖伏矣。誠其意等章。午出考槃台。良久坐而壘遠近景致。歎其眼明之不如前時也。俄而思馭風凌雲二台。率童三冠二。而上馭風台。歎形勝之奇異。食頃而返。是日初昏就寢。未子而起。整冠而坐。復默然而已。德弘從容問曰。前日先生教德弘曰。立主宰不過一敬字、「曰。敬之為說多端。如何可以不陷於忘助之病乎。先生曰。其為說雖多。而莫切於程、謝、尹、朱之說矣。但学者或欲做惺惺工夫。或欲做不容一物工夫。而先有心於尋覓。或有涉於安排。則其不生攫苗之病者幾希。不欲助長而纔不用意。則其不至於舍而不耘者亦罕矣。為初学計。莫若就整齊嚴肅上做工夫。不容尋覓。不容安排。只是立脚於規矩繩墨之上。戒慎恐懼於須臾隱微之際。不使此心少有放逸。則久而後自然惺惺。自然不容一物。無少忘助之病矣」、「德弘從容問曰。前日先生教德弘曰。立主宰不過一敬字。而敬之為說多端。不如姑就整齊嚴肅上做工夫。則無少忘助之病云。敢問勿忘勿助。以參同契火法証之。所謂火法者如何。先生曰。參同契法。看久忘却。大端。人之為体。惟火與水。水即血。火即氣。以八卦之坎水離火分血氣。以乾坤為鼎煉內丹。以六十卦分定三十日。又以二卦分定一日。又以二卦十二画分定十二辰。以天之氣。

使合我之氣。以月之盈虛。抽添而煉之。德弘從容問曰。前日先生教德弘曰。立主宰不過一敬字。而敬之為說多端。不如姑就整齊嚴肅上做工夫。則無少忘助之病云。敢問勿忘勿助。以參同契火法証之。所謂火法者如何。先生曰。參同契法。看久忘却。大端。人之為體。惟火与水。水即血。火即氣。以八卦之坎水離火分血氣。以乾坤為鼎煉內丹。以六十卦分定三十日。又以二卦分定一日。又以二卦十二画分定十二辰。以天之氣。使合我之氣。以月之盈虛。抽添而煉之。月盈則添之。月虛則抽之。不使少離於天之氣。使血凝定於肺。至於三年。則身輕骨寒。白日飛騰。此內丹法。其間妙法。不可勝既。然此難於我等之工夫也。翌曉。又味爽而起。盥漱衣帶。危坐觀書。教史阿淳。到武后玉真事。未嘗不臨冊三歎也。德弘又質心經修身在正其心等章。食後。先生持晦菴書。登凝思台坐一餉。頃因陟朗詠台。恨其不便。令僧負石作砌。撫愛稚松。親條其枝。亦莫不歎形勝之奇絕也。厥功未終。監司書來到。令德弘見之。即入修復。鄉人送樸魚。命藏之。是昏明燈。作七台詩吟詠。移時數更而還寢。曉又明燈而看晦菴書。乃念七日也。朝分送藏魚於鄰老。而後嘗之。阿淳之講學。雖不能通。委曲諄諄。未嘗見怒。只明言能不能之如何而已。食後大風。先生曰。寒甚不可付役於頂上。德弘曰。明若寒於今日則奈何。曰。非但役者之寒。看事者亦寒。何必明日。姑待後日云。德弘又受業。到樂記札樂不可斯須去身章及附註言忠信行篤敬之說。問心學以心中有一物為非。而只為忠信篤敬。念念不忘。使參前倚衡。莫是偏繫之病乎。先生曰。故先儒曰。既不可著力。又不可不著力。是日午後風歇。又率僧輩。付役朗詠台。而手持一卷晦菴書。因坐松下。講讀移時。又役未畢而入。食後即出考槃台。望見朗詠台。還入室。危坐終夕。至夜未亥就寢。僅子還起。整襟默坐。其有所事。非德弘之所能逆觀也。又教德弘敬字之義曰。持以整齊嚴肅。則其所事者。必涵養未發之中乎。未訖丑而還寢。僅寅而乃起。取燭記所詠詩。又與之德弘。其一招隱台。招招幽隱歷崎嶇。抱犢山中莫苦心。却是幽人不知苦。反唱歌罷入雲深。其二月瀾菴。不到瀾台今幾年。明窓一室坐如禪。憶曾感慨西林意。秋月冰壺奈杳然。其三考槃台。百尺丹崖上有台。蒼松鬱鬱問誰栽。野僧結屋堪來隱。還愧吾非碩軸才。其四凝思台。越壑穿雲陟磴危。小巖頭戴古松奇。只今已是忘機事。終日凝然有底思。其五朗詠台。無限雲山落眼前。玉虹縈帶是長川。何妨掃地憑高處。快試興公朗詠篇。其六凌雲台。欲作凌雲且自稽。開荒他日倩僧儂。要令病腳來登處。千岵雲鬢一眼齊。其七馭風台。列子當年骨已仙。飛空無跡馭冷然。我今延佇高台上。恰似從渠上得天。德弘問曰。今日大風若此。送人姑止人馬之來如何。曰。然。此處最高。寒不可久留也。俄而從容誨余曰。昨日所論既不可著力。又不可不著力之說。不若伊川非著意。非不著意之為愈也。翌日朝。又誨余曰。今人之父兄。每以誦心經、近思錄為非。而有切責之者。學者亦恟於時務。為此學者少。吾誦心經。不得無未安之意。柳而得之為人。未能易得。而今也得病非常云。可用之人。何以每如是邪。不勝痛恨。臨別。拜而言曰。以俟更面。以杖下洞。德弘隨之。先生上馬回見曰。何必下來。君亦下家邪。蓋記夢之語驗矣。而シテ斯ノ如キハ特ニ並行ニ於テ然ルノミナラズ、真ニ退溪ノ日常生活ナリシナリ。故ニ艮齋ハ更ニ「溪山記善録」ノ淵頂ニ記シテ曰ク、「先生毎夕兀然默坐。向晦宴息。夜分而起。擁衾而坐。因取燭看書。曉頭更小息而興。」退溪ノ生活ニ於テ夜氣ヲ養フニ於テ心ヲ注ギシコト、注意ニ値ス。

なお、以下の注記は『高橋亨朝鮮儒学論集』所収の「李退溪」では、本文中に書き込まれている。「蓋シ養夜氣ハ、真西山ノ特ニ重要工夫トナセル所ノ『心經』坤篇ニ、孟子牛山章ヲ特書シテ縷々之ヲ附行ス。西山「夜氣箴」ヲ作りテ、「不敢弛然自放於牀第之上。」ト言ヘリ。退溪ガ『心經』ヲ尊崇スルコト、朱書ニ次ケム。所以而シテ、『心經』ニ循リテ道学淵源ニ悟入セル所以ノ一ハ、養夜氣ノ実践体得ニアリシコト、ベカラズ。而シテ、是レ吾人後学ニ向テ重大ナル教訓ヲ垂ル、者ナリ。退溪ノ此ノ生活ハ、後ノ朝鮮学者ニ模範ヲ垂レ、彼ノ孝宗・顯宗朝ノ大儒・宋允庵ノ日常亦

ヲ愛ル、尤モ梅ヲ愛セルハ、其ノ臨終時ノ梅兄云々ノ言ニモ徴スベキガ、亦其性格ノ一標致トナスベシ。嘗テ弟子金惇叙ニ答テ、因ミニ好梅種ヲ送寄セシコトヲ附託シテ曰ク⁴³、
此間或得梅植。其品皆不佳。南郷得佳品。取其少者。以土封其根。寄來何如。但南方早榮。今無及矣。梅黃時。取其實寄來。而梅植則姑待十月。亦佳。
今彼ノ集ヨリ梅花詩ヲ選集シテ、『退陶梅花詩』一卷ヲ伝フ。

(INOUE Atsushi)

ト此ニ彷彿タリ。『宋子大全』附録卷十八「崔慎録」に、尤庵平生ヲ録シテ曰ク、平居無事。則毎日向晦而就寢。令侍者櫛髮而睡。纔到二三更許。必擁衾而起坐。誦庸学孟子尚書等正文各數篇及朱文二三篇。鷄鳴則呼童明燈。或著述人家墓文。或裁答人書札。或考閱古今書籍。天欲明則滅燈還寢。日出即令進盥。」

43 『高橋亨朝鮮儒学論集』所収「李退溪」では、この部分は「附託した」で終わっているが、講義ノートではそれに続けて『退溪先生文集』卷之二十八「書」答金惇叙より、「此間或得梅植」で始まる引用がある。『斯文』掲載文では、引用を省略する代わりに、「今彼ノ集中、梅花ノ詩ヲ選集シテ、『退陶梅花詩』一卷ヲ伝ヘテ居ル。」という一節が記載されている。